

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

第1回 AA 研共同利用・共同研究課題「死の人類学再考—変容する現実の人類学的手法による探究」

日時：2021年4月18日（日）14:00-18:00

場所：Zoom

使用言語：日本語

プログラム：

第一部

14:00～15:00

西井涼子(AA研所員)『アフェクトゥス』解題—生の潜在性から思考する

第二部

15:00～18:00

メンバー全員による『アフェクトゥス』から触発された研究構想発表

概要：

第一部

西井が『アフェクトゥス—生の外側に触れる』京都大学学術出版会（2020年12月15日刊）AA研の共同研究課題「ダイナミズムとしての生—情動・思考・アートの方法論的接合」（2017～2019年）のメンバーを中心にした成果論集（クラパンザーノの論考を含む）の概要と、そこで議論されたこと、何を伝えたかったのかについての一端を報告した。

特に、エスノグラフィにおける創造性の関係について、それは偶発性・一回生の出来事から感受することであるとした。フィールドワークの中でまず、違和感をもったことから、コンテクストを模索する。データが先でもなく、後でもなく。アンテナを張り巡らせて、やってくるものを待つ。それは、生命のもつ「一瞬一瞬に他でもあり得るかもしれぬ」という潜在性に通じる。

エスノグラフィはそうした過程を、外部＝生の潜在性をめざして記述することであるとし、これまで人類学的フィールドワーク論で、「直観」とされてきたのは、それが意図的に手にいれることができない、深く生の潜在性から到来するものを「待つことで授

かる」ものだと述べた。まとめると「アフェクトゥス/アフェクト的な現実」の記述とは、目に見え体験されるものの水面下での異質で複雑な内在的な力の絡まり合いを生る潜在性として捉え直しながら現実を思考することであり、それにより世界の見方の根本的な転倒を行うことである。

質疑応答では、事実確認の質問以外には、大きく次の2点について議論した。

1) エスノグラフィの「アフェクト/アフェクトゥス」的な記述は、これまでの人類学的な記述にもすでにあるものではないか、「アフェクト/アフェクトゥス」を使わなくてもできることではないか。これを使うことでこそ明らかになることは何か。

これについては、身体性や、集合性と個の問題にかかわり、これまでもそうした記述はあるが、「アフェクト/アフェクトゥス」を念頭におくことで、そうした問題系を外部とつなげていく議論として展開できると利点があるとした。

2) アフェクト的な記述は、その研究者自身にしかわからないことではないか。

この質問への応答は1)と共通しているが、アフェクト的な記述は、個に閉じたものではなく、生の潜在性につながっているとした。

第二部

それぞれが、第一部の議論と関連づけながら、今後のテーマについて報告した。

テーマは以下の通り。

磯野：コロナ状況下における予防医学と数値モデル

加賀谷：最期の時の迎え方、介護の現場から

丹羽：東日本大震災における死者と死者を映す技術（アート）

金：喪興歌（サニョ）と弔い

田中：多死社会における「死の設計」、葬儀従事者の経験から

土佐：暴力と死

黒田：アンチエイジングの現場—老化しない細胞

（文責：西井）